

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

第2回ドイツ演奏旅行帰国記念演奏会

# 17世紀ドイツ聖堂の響き



---

1991. 3. 10(日) PM 2 : 30開演

岩手県民会館大ホール

主催：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

後援：岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・岩手日報社・NHK盛岡放送局・岩手放送・テレビ岩手・エフエム岩手・岩手日独協会

写真提供\*石川量啓

# ご あ い さ つ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

代表 小野寺 昌 勝

本日はお忙しい中ようこそおいで下さいました。

今日の演奏会は、1990年12月23日から、1991年1月8日までの計17日間にわたるドイツ演奏旅行の帰国記念として企画いたしました。プログラムの内容はドイツ各地で演奏してきたものと同じですが、オルガン伴奏で演奏された曲を今回はオーケストラ伴奏で演奏いたします。演奏旅行での演奏とはまた違った味をだすことだろうと私達も楽しみにしております。

そもそも、この演奏旅行は、デットモルト音楽大学学長、ドイツハッペ郡郡長、全ドイツ声楽家協会会長より、正式に御招待をいただき、ソリストとして同行していただいた他、現地でのマネジメントなどもお願いいたしました佐々木正利先生、今仲幸雄先生はじめ多くの方々の御協力を得て、実現いたしました。また、今回初めて演奏会と同時進行で企画しました日独文化交流会では総理大臣、岩手県、盛岡市よりお招きいただいた団体に対する公式のメッセージをいただき、さらには、財団法人盛岡地域地場産業振興センター、南部鉄器協同組合、花泉町立花泉南中学校から数多くの民芸品、工芸品をお借りするなど多大な御協力をいただき、演奏会、文化交流会のいずれもよい成果を収めることができました。

この場をお借りして、御協力いただいた皆様に改めてお礼申し上げます。

また、演奏旅行に同行していただいたカメラマン石川量啓氏の撮影によります演奏旅行の写真を会館ロビーに展示しておりますので演奏とあわせてお楽しみ下さい。

最後に、指揮者佐々木正利先生はじめ、オーケストラ・ソリストの諸先生方、後援をいただきました皆様に感謝して、ごあいさついたします。

# プログラム

## I 部

H. Schütz

H. シュッツ作曲

- Psalm 100 “Jauchzet dem Herren, alle Welt” SWV493  
～詩篇 100 番「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ」
- Deutsches Magnificat “Meine Seele erhebt den Herren” SWV494  
～ドイツ語マニフィカート「私の魂は主をあげめ」

D. Buxtehude

D. ブクステフーデ作曲

- “Magnificat anima Mea”  
～「私の魂は主をあげめ」

## II 部

G.H. Stölzel

G.H. シュテルツェル作曲

- Psalm 130 “Aus der Tiefe rufe ich Herr zu dir”  
～詩篇 130 番「深き淵より、我、汝を呼ばわる」

——バス独唱 今 仲 幸 雄

D. Buxtehude

D. ブクステフーデ作曲

- Psalm 110 “Dixit Dominus Domino meo”  
～詩篇 110 番「我が主に、神から御言葉あり」

——テノール独唱 佐々木 正 利

----- 休 憩 -----

## III 部

J. S. Bach

J.S. バッハ作曲

- Motette II “Der Geist hilft unsrer Schwachheit auf” BWV226  
～モテット 2 番「聖霊は弱い私達を助けて下さる」
- Motette I “Singet dem Herrn ein neues Lied” BWV225  
～モテット 1 番「主にむかって新しい歌を歌え」

指 揮……………佐々木 正 利

コンサートマスター…蒲 生 克 郷

オルガン……………水 野 克 彦

弦 楽・東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

合 唱・盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

## 【帰国報告演奏会にのぞんで思うこと】

盛岡/バッハ・カンタータ・フェライン  
常任指揮者 佐々木 正 利

“Vertrautheit mit Sprache, Ton und Geist der Werke”

(作品の語感、音、そして精神の完熟)

この見出し記事は、今回のドイツ演奏旅行、第6回目のステージ、パート・ザルツフレン市のクア・ハウス大ホールにおけるア・カペラ演奏会に寄せられた新聞批評である。(Lippische-Landeszeitung, 4. Jan. 1991.) 前回の時もそうであったが[脚注]、私自身、客観的見地から判断するに、我々の演奏が殊更優れているとは思わないのだが、現地の新聞は最大級の賛辞をもって評価して下さる。この理由は一体何なのだろうか。希望的観測は我々に勇気づけてはくれるが、本質的、根源的なエネルギーとして奮い立たせてくれる原動力にはならないので、この観点からの論は今回はペンディング、冷静なる現実把握をもとに、この点を分析すると、二つの結論が見えてくる。その一つは、世界地図の東の果ての仏教国!? から来た職業合唱団でもない団体、つまり、プロでもなく、日常的な使命を帯びている(例えば、教会直属の聖歌隊など)わけでもない合唱団が、専門的見地から推すと、相当に難しいであろう彼らの音楽を見事にこなしたことに對する、特権意識的称賛がベースにあるということ、そして今一つは(コノテングカンジンナノダガ……)、アマチュアイズムがかもした日常的な喜怒哀楽の中に、我々なりに努力してきた音楽作りの結果が『生きたもの』として、彼らの心に受け入れられたということである。この点をもう少し詳しく説明しよう。つまり、例えば、バッハもモーツァルトもベートヴェンも、たとえ独語を知らなくても、その音楽自体が既に国際言語になっているが、今回、我々が取り上げたドイツ・パロック期の声楽作品は、音楽を形成する諸要素の中でも、とりわけ、言葉に対する比重が重い作品であり、その点、我々の日頃の音楽信条【《言葉が生きる》と《音楽が生きる》とは歌の世界では同義語である】が功を奏し、稚拙ではあったが、彼らの心に訴えかけるものが、確実に存在したということであろう。我々にとって、外国語を理解し、それらしく発音、表現するのは確かに大変なことである。しかし、この困難を努力によって克服することこそが、生きた言葉をベースに作曲された作品の真髓に迫れる絶対不可避の道筋であり、又

不思議なことに、そのプロセスを根気強く辿っていくと、我々の予想以上に作品が輝きを発揮することになる。結局、この段階に至って、初めてその作品の眞の価値を表現したことになるのであるから、この観点から見ると、今日我が国で行われている外国声楽作品演奏の数多くは、にせものに属するといっても過言ではない。いささか、過激な発言になってしまっただが、これも、作品に魂を吹き込めるのは、言葉の正しい理解、表現なくしては不可能なことと強く考えたからであり、既に作曲者自信によって一度テキスト解釈がなされているのだから、その音楽(音の連なり)だけを指示に従って再現できさえすれば、その心の表出は十分可能である、とする考えを、一步譲って、前提として認めたとしても、尚、演奏する側の姿勢、モラルは不十分であることを、お互いに認識したいのである。いずれにしても、次の三つの基本的連鎖、即ち、音楽だけでなく、言語を理解、会得しようとする声楽解釈モラル、その結果ひとりでの動めき始める作品の生命力の感受、そして、こうした作業を継続、全うすることによって生まれる再現者の自信、確信が、演奏に至る経緯の中で実践されているかどうか、国、民族、言語、宗教、習慣、時間の壁を乗り越える鍵となるのではないかと、ということを目指したいわけである。

我が国において、合唱音楽との係わり方の形態は多種多様である。従って、取り上げる作曲者、曲種、題材も千差万別、我々もその末席を活しているにすぎない。しかし、この一介の合唱団が、実滞独14日中、8回もの公式演奏会を催し(しかも感謝なことに、それぞれに最大級の賛辞を頂戴し)、それだけでなく、ハーゲン市、デットモルト市などで、市長直々のお出迎えを受け、又デットモルト市における公式歓迎行事“日本の夕べ”では、州知事、市長、音大学長、日本国ドイツ総領事ご列席のもと、(聴衆約600名)、我が国の伝統文化、芸能を披露、全くの民間使節なるも、国際親善交流に一役も二役もかうことができたことの意味をよくお考えいただきたい。こう敢えて申し上げるのも、今回、確かに海部総理直々の親書を携え、県知事、市長のメッセージも持参、又少なからぬ金銭援助も頂戴した企画ではあったが、特別同行の使者(マスコミ関係も含めて)が一人もいなかったというのは、いかに民間

外交とはいえ、先方に対し気まずい思いをしたのも事実だったからである。国際文化都市を標榜せんとしている県、市に対し、何に光を当て、何に金を使ったらいいのか、正しく判断できる本物の眼を養って下さるよう強く期待するのは不道理であろうか。

我々の演奏は決して上手ではない。又活動自体派手な業績を目指すものでもない。しかし、何物にも規制されない、心の内面からの表現意欲を最も重要な拠り所として根幹に据え、そこから派生する《生き生きとした音楽》作りに邁進したいと願っているのも又本意である。今回の演奏旅行実現の立役者、今仲幸雄氏もその同志であり、我々一同、心から尊敬している音楽家であるが、氏の歌の力がどこに根付いているかを、今宵とくとお聴き願いたいものである。

最後に、なぞかけにも似た三つの発言を並記して、我々の今後の活動を計る指針にして頂きたいと思う。

- ・演奏会後のロビーで或るドイツ人の言葉「彼らのドイツ語、発音もニュアンスもほぼ完璧なのだが、彼らはどうしてドイツ語を話せないんだろう。」
- ・日本の或る合唱指導者の言葉「外国曲に比べて日本の作品が魅力に乏しいとしても、それだからこそ、我々が取り上げ演奏しなくては、日本の作曲者を誰が育てるのか。」
- ・或る中堅プロ歌手の言葉「オペラで人殺しの役を演ずるには、実際に人を殺した経験をもたないといけないんだろうか。」

——これに対する我々の回答は、今後の活動を通じて証ししていくことになる。

[脚注]もし、我々がドイツ人の中で、我々のシュッツ、バッハを継ぐ者がいなくなつたとしても、この東洋の人々が、確実にそれを継承してくれるであろう。(Duisburger-Zeitung, 4Mai. 1986.)

## プロフィール

指揮・テノール 佐々木 正 利

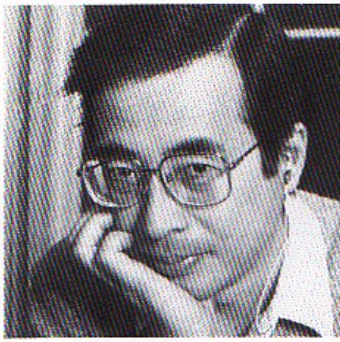


東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修士課程及び博士後期課程修了。声楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫、森明彦の各氏に、楽理を服部幸三、角倉一朗の各氏に、作曲を松本民之助に、宗教音楽を岳藤豪希氏に師事。芸大在学中より、パロックから現代に亘る宗教作品、特にJ・S・バッハの声楽曲に深い造詣を示し、芸大メサイヤ公演、定期演奏会ははじめ大学、一般合唱団と多数共演、特に1978年芸大マタイ受難曲公演にて福音史家として高く評価され以後そのスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。

1979年シュトゥットガルトに渡り、ローレ・フィッシャー教授に師事。同年南ドイツにて数回歌曲リサイタルを開き好評を博す。1980年第6回ライブツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より1982年まで、デットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、ヘルムート・クレッチマール教授に師事、この間同大学定期演奏会で、ドヴォルザーク・レクイエムのア・カペラソロを務めたのをはじめ、ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、オランダ、ベルギー各地で一流オーケストラ、合唱団と多数共演。1980年ウィーン楽友協会ホールに於けるマタイ受難曲においては「若き日のペーター・シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。1982年ハンブルグ・ブリュッセルの短調ミサでは特に高い評価を得た。帰国後もN響、読響、都響日フィル、新日フィル東響の定期演奏会等に出演し、K・マズア、H・シュタイン、H・プロムシュチット、H・ヴァンシャーマン、H・リリング、小沢征爾、秋山和慶の各氏等と共演。1985年ザルツブルグ音楽祭に招かれ、R・バーダー指揮のベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊、ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団とバッハ・マニフィカト、モーツァルト戴冠ミサを共演、好評を博す。滞独中オペラでは、コシ・ファン・トゥッテ・フェランド、フィデリオ・ヤッキーノ、スカララッティ・グリセルダ・コッラード等で出演、現在までリサイタル8回、NHK-FMリサイタル3回等歌曲の分野でも活躍。長年にわたり、小林道夫氏のもと東京芸大バッハカンタータ・クラブの指揮者を務め、後進の指導にあたる。1987、88年にはH・リリング音楽監督のバッハアカデミーにて、テノール・マスタークラスの講師を務める。現在、岩手大学教育学部音楽科助教授。二期会会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。

グルッペ・ベツヒライン会員、仙台バッハ・アカデミー理事

岡山バッハ・カンタータ協会指揮者、水戸バッハ・コレギウム音楽顧問。



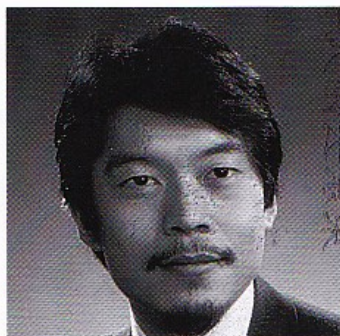
## バス 今 仲 幸 雄

1949年、成田市三里塚生。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。渡辺高之助、小林道夫、高折統各氏に師事。1976年西ドイツ・国立デットモルト北西音楽大学留学、ヘルムート・クレッチマール、ハンス・クールマン、ディートリヒ・フィッシャー—ディースカウ各氏に師事。1978年オーストリア・ウィーン国際シューベルト・ヴォルフ歌曲コンクール、ディプロマ賞受賞。1980年東ドイツ・ライブツィヒ第6回国際バッハコンクール男性部門優勝。同年成田市文化功労賞受賞。1981年国立デットモルト北西音楽大学卒業、西ドイツ演奏家国家試験最優秀合格。以来、西ドイツ、東ドイツ、スイス、フランス、イタリア、イギリス、オランダ、シンガポール、台湾にて演奏活動。またライブツィヒ国際バッハ音楽祭、ゲッティンゲン国際ヘンデル音楽祭、ヴァルスローデ国際リスト音楽週間にソリストとして招かれる。NHKをはじめ、NDR(北ドイツ放送)、SFB(ベルリン自由放送)、WDR I・III(西ドイツ放送第一、第三)SWF(南西ドイツ放送、テレビ)、ERF(ドイツ・キリスト教放送)等に出演。ドイツ・バッハゾリステン、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス・バッハオーケストラ、北ドイツ放送管弦楽団等と共演。オラトリオ・リート歌主として、バロックから現代曲までのレパートリー。現在西ドイツ・デットモルト在住。元国立デットモルト北西音楽大学講師。



## コンサートマスター 蒲 生 克 郷

1976年東京芸術大学卒業。NHK-FM『夕べのリサイタル・新人演奏会』に出演。1976年～1978年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団奏者、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスターを務める傍ら、ヴュルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。帰国後は室内楽奏者として憩弦楽四重奏団、東京バロックアンサンブル、東京バッハアカデミー、久合田緑弦楽四重奏団等で活躍する一方、芸大バッハカンタータクラブ、盛岡/バッハカンタータフェライン、盛岡/バッハアンサンブルの指揮者を務めた。1987年～88年神戸女学院大学講師。現在、アンサンブル of トウキョウ、エルデーディ弦楽四重奏団各メンバー。水戸バッハコレギウム指揮者。東京芸術大学弦楽研究部講師。多久興、海野義雄、ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。



## オルガン 水 野 克 彦

東京芸術大学卒業。ピアノを滝崎鎮代子、クラリネットを千葉国夫、室内楽を細野孝興、オルガンを今井奈緒子の各氏に師事。現在はピアノ伴奏、オルガン、通奏低音の他、合唱指導、作曲と幅広く活動。今年一月には東京大学オルガンコンサートのソリストに迎えられ好評を博す。

# 東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京芸術大学の学内サークルとして活動しているバッハ・カンタータ・クラブのOBを中心に、今回の様なバッハの宗教曲等の演奏会の為に編成される室内オーケストラである。母体となっているバッハ・カンタータクラブは、1970年に創立、顧問に服部幸三教授、指導・指揮に小林道夫氏を迎え、現在に至るまで、毎年の定期公演を中心に活発な活動を続けている。また、北海道・東北・東海・関西方面への演奏旅行も行っている。両合唱団とは、バッハ「ヨハネ受難曲」、ヘンデル「メサイア」等、数多く共演し、好評を博す。今回の演奏会に参加したメンバーも各自が、日本のトップオーケストラの首席奏者として、また独奏者やアンサンブルの一員として、各方面で活躍し、その卓越した演奏力と音楽性には、高い評価を得ている。

Violin I	蒲生克郷	Violin II	花崎淳生	Viola I	李善銘
Viola II	須田あゆみ	Cello	中沢央子	Contrabass	蓮池仁
Organ	水野克彦				

# 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

## 〈ソプラノ〉

泉山尚子	♪泉山真貴子	伊藤香織	伊藤美奈子	伊藤由美
岩井花文枝	○遠藤澄江	○小原育世	帷平茂子	門脇たたえ
金子亜貴子	菊池節子	久保木万喜子	熊谷充代	小池美紀
斎藤景子	●斎藤純子	嵯峨みか子	佐々木祐子	佐藤千砂
沢田東子	清水真理子	菅村雅子	高橋由華	滝沢真紀子
丹野貞子	土室千春	中村澄江	新沼理恵	早川貴子
平野陽子	○福田温子	村上伊々子	柳田松子	矢幅嘉子
吉田朗子	吉田真由美	渡辺栄美子		

## 〈アルト〉

阿部怜子	遠藤晴美	○小川暁美	金子千鶴	兼田紀美子
菊池美樹子	桐原絹子	朽木泉	佐々木志保子	●佐々木久子
佐々木美智子	佐藤志津	鈴木千秋	鈴木英美	多田有里子
玉田由紀子	丹野まり	千葉万理子	中田真佐子	中野晶子
○鳴海真希子	早川芙美子	早坂ルミ	福田祐子	袋井雪子
盛山智美	吉田まき子			

## 〈テノール〉

遠藤康成	及川豊	太田穎則	●織田靖夫	斎藤健
○佐々木朋也	□佐々木幹雄	菅原伸作	千葉晴重	中野寛司
寺沢敬行	遠藤淳			

## 〈バス〉

泉悟	稲葉正俊	○稲辺督	小野寺昌勝	■小原一穂
木村吉彦	佐々木直樹	佐々木義幸	佐藤和久	佐藤英靖
下田潤	杉井智一	武田宏之	藤田知彦	松島俊二
●三嶋豊	横山泉	*佐藤佳樹	*安倍勝	

●パトリリーダー ○サブパトリリーダー ■コンサートマスター  
□サブコンサートマスター ♪練習ピアニスト \*仙台宗教音楽合唱団



# 曲 目 解 説

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン  
サブコンサートマスター 佐々木 幹 雄

ルターの宗教改革と、プロテスタント音楽の変遷に関する主観的一考察

……盛岡バッハ・カンタータ・フェライン「17世紀ドイツ聖堂の響き」演奏会の曲目解説として……

## ⇒ 17世紀ドイツの社会状況

17世紀のドイツは、「神聖ローマ帝国」という名前で知られているが、その実態は、封建諸侯の共和国のようなもので、多くの封建諸侯達を統括するはずの「神聖ローマ帝国」の実権はほとんど形式にすぎないものであった。

17世紀のドイツ社会を知るためには、やはり、16世紀にかの地で起こった「宗教改革」にふれなければならないだろう。16世紀初頭に生きたマルティン・ルター（1483～1546）によって引き起こされたこの宗教改革は、17世紀のドイツ国内（神聖ローマ帝国）に大きな波紋を投げかけた。

M. ルターは1522年に新訳聖書をドイツ語に訳し翌年、出版した。その後「教会における礼拝の順序について」（1523年）、「ドイツ・ミサと礼拝の順序」（1525年）等を出版し、キリスト教の世界をドイツの民衆の世界に近付けることに努力した。その際、「コラール」という画期的な方法を生み出した。「コラール」とは、教会での礼拝の会衆賛美として参加者全員で歌われるもので、一人ひとりの信条を教会の中で神に伝えるものである。全員が歌うためには、できるだけ人々がよく知っているメロディーを多く採用しなければならなかった。（このことが後のD. ブクステフーデやJ.S. バッハの素晴らしい音楽遺産を生み出す原動力となった。）しかし、M. ルターはカトリックのミサを排除することはなかった。また、新しい教会秩序を作り上げるために、教会組織のすべてを諸侯や自由都市の政府に委ねる形をとった。（なお、彼が聖書のドイツ語訳の作業を行ったのは、ザクセン選帝候フリードリッヒのもとであった。）

1530年ごろから新教と旧教の対立が激しくなり、1555年のアウグスブルク宗教和議によって新教と旧教の同権が認められた。しかし同時に、臣下・民衆は君主の宗教に従わねばならないということが決められた。

1618年から1648年まで行われた「ドイツ30年戦争」は、その初期には、まさに宗教戦争であった。H. シュッツやJ.S. バッハが活躍した中部ドイツのザクセン選帝候国は1630年になって、プロテスタント側として「ドイツ30年戦争」に参戦した。その戦争は1648年のヴェストファーレン条約によって決着がつけられるのだが、その条約によって、諸侯の完全な国家主権が認められ、17世紀ドイツの、あの、虫食いのような国境線と新旧両キリスト教の入り乱れた勢力分布が確定したのであった。

このドイツの30年戦争によって、中部ドイツや北ドイツは荒れ果て、人口も3分の1にまで減ったといわれている。ルター派は、主戦場となった中部ドイツの

地に多く、戦争中は音楽家達も思うような音楽活動ができない状態におかれた。しかし、H. シュッツをはじめとする素晴らしい音楽家達のおかげで、ルター派教会音楽は独自の展開を見せ、18世紀になると安定した社会を背景としてJ.S. バッハが登場してくるのである。

## ⇒ 17世紀ドイツの音楽家と本日の演奏曲目について

当時（と一つにくくるとは難しいのであるが）、音楽の世界をリードしていたのはG. ガブリエリやモンテヴェルディに代表されるイタリアであった。ドイツの宮廷にも多くのイタリア人音楽家が雇われ、ヴェネツィア様式の音楽を展開させていたと思われる。

また、ドイツ人音楽家もイタリア留学するなど、イタリア音楽の影響が各地に及ぼされていたと思われる。事実、H. シュッツはG. ガブリエリに師事したし、D. ブクステフーデもローマのプレスコバルディの弟子であったフローベルガーに師事したのであった。

H. シュッツ（1585～1672）についてみてみよう。

H. シュッツは1617年からザクセン選帝候国のドレスデンの宮廷に勤めた（ここには1548年～1553年にルターの音楽面での最大の協力者であり、「コラール曲集」の出版等でも知られるヨハン・ヴァルターが勤めていた）。30年戦争のさなか宮廷楽団の団員が10名足らなくなった時代でも、彼は粘りよく音楽活動を続け、戦後の1657年に引退するまでの40年間、ドレスデンで活躍した。

彼はヴェネツィアのG. ガブリエリに音楽を学び、G. ガブリエリお得意の二重合唱の大アンサンブルの手法を受け継いだ。また、モンテヴェルディからは「モノディ」といわれる朗唱の手法を学び、それをドイツ語独特の造形性に応用した「レチタティーヴォ」をつくりだした。彼は、言葉を音楽にのせること、（宗教改革でルターが望んだように）ドイツ語を音楽にうつし、ルターが訳した味わい深いドイツ語を的確に音楽化し、そのことによって強靱なそして柔軟な表現力を身に付けた。悲惨な30年戦争を経験したシュッツは、厭世的な世界観が支配する時代に心の内面に目を向け、テキスト（歌詞）を深く掘り下げることによって、安定し繁栄した社会のもとでは届くことのない深みにまで表現を到達させた。

本日の演奏する「ダビデの詩篇100番」と「ドイツ・マグニフィカート」は共に「白鳥の歌（Der Schwanengesang）」という曲集におさめられたものの終わりの2曲である。Der Schwanengesangとは、いつてみれば「辞世」の作品である。まさに1672年、86才という高齢でシュッツが亡くなった年の作品である。

「ダビデの詩篇100番」は聖書の詩篇からテキストがとられている。「全地よ、主に喜び叫べ！ 喜びをもって主に仕えよ！」と先唱者から二重合唱へと歌い継がれる、壮麗でしかも涙を含んだ歌いだして始まる。部分的に、「パートの追いかけてこ」が挿入され、「私達は神によってつくられた民であり羊であって、自分達自信で作りだしたのではない。」と歌われる。後半では先唱者の「父と子と聖霊に栄光あれ」に続き、「初めにあったように、過去も今もそして未来も永遠に。」と歌われる。この部分のテキストは「白鳥の歌」のほぼ全曲に採用されている。

「ドイツ・マグニフィカート」は、カトリック教会ではラテン語で歌われるいわゆる「マニフィカート」のドイツ語版で、キリスト、イエスの受胎を天使から告げられたマリアの歌に作曲されたものである。重厚な二重合唱8声部の合唱曲であり、やはり後半には「父と子と聖霊に栄光あれ………」というテキストが添えられている。

次に、D. ブクステフーデについてみてみよう。

D. ブクステフーデ(1637~1707)はおそらく日本人にはあまり知られていない作曲家ではないかと思う。ノルベール・デュフルクという人は「バッハは、シュッツがいなければ説明できないかも知れないが、ブクステフーデがいなかったら考えることもできまい。このリュウベックのオルガニストは北ドイツの音楽家中の立て役者であり、その作品には術学趣味と幻想が不思議な形で混ざりあっている。」と語っている。

ブクステフーデはドイツの北のはしりリュウベックで1668年から1707年まで、この町のマリア教会のカントールとして、また北ドイツを代表するオルガニストとして活躍した。この教会のカントールは、リュウベック名物である「夕べの音楽」という公開演奏会をひらく義務があり、D. ブクステフーデもその仕事に力を注いでいた。30才の若きJ.S. バッハがはるばるリュウベックの町までD. ブクステフーデの「夕べの音楽」やオルガン演奏を聞きに行ったことは有名である。

オルガニストとしての彼はドイツ国内に名を馳せ、その音楽はイタリアの伝統とスウェーデンのネーデルランド(オランダ)の伝統とを融合させ、彼独自の「北方的な様式」をつくり上げた。

一方、彼の声楽作品はオラトリオが7曲、ラテン語のミサが2曲、教会カンタータが120曲あり、ローマ楽派のジャコモ・カロッツミの影響があるといわれている。

本日演奏する「マグニフィカート」は、リトルネツォ形式で作曲されている。リトルネツォ形式とは独奏部の間にいつもほぼ同じ形で現れる反復的なトゥツティ部をもつ形式である。この曲の場合、独奏部にあたる部分が合唱でありトゥツティ部は弦楽の合奏である。また、合唱部はコンチェルティーノといわれる独唱的で技巧的な部分とリピーエーノといわれる和声的な合唱部分とから構成されている。

テキストはラテン語であるが、内容は前述したH. シュッツの「ドイツ・マグニフィカート」の前半部と同じである。

さて、いよいよJ.S. バッハの登場である。

J.S. バッハ(1685~1750)は、中部ドイツのザクセ

ン地方でカントールとして活躍した。カンタータやオルガン曲の作曲家としてよく知られている。

本日演奏する「主に向かって新しい歌をうたえ」と「聖霊は我らが弱きを救い給う」は「モテット」といわれる形式をとって作曲されたものである。

J.S. バッハにおいては、「モテット」とはカンタータと同様プロテスタント的心情を音楽的に表現したものであるが、ソロや器楽合奏がおもてだって登場することはなく、合唱によってのみ演奏される(器楽合奏が合唱の各パートを補強するように演奏されることもある)。また、現存する6つのモテットのうち4つまでが8声部の二重合唱でかかっている。ここにH. シュッツから連なる、声楽における作曲の特徴をみることができよう。また、ルター派であったJ.S. バッハは、ドイツ語を的確に音楽化することを常にめざし、メロディーの音型やコーラルへの和声付けの工夫によって、ほとんど完璧と言っていいほどの独自の世界をつくり上げた。

彼の作品においてコーラルは重要な位置をしめている。コーラル旋律を生かして作曲されるコーラル・カンタータやオルガンで演奏されるコーラル前奏曲がある(このコーラル前奏曲はD. ブクステフーデによって魅力的なものとしてJ.S. バッハに紹介されたものである)。

また、受難曲やモテットのなかにもコーラル旋律が使われ、音楽を耳にする側であるドイツの民衆の心に寄り添い、訴えかける。

「聖霊は我らが弱きを救い給う」(モテット2番)は、1729年に葬式のために作曲されたものである。とは言っても、けっして気分が落ち込んでいくようなものではなく、(テキストの内容からもわかるが)「どのように祈り捧げたらいいのかわからない私達の弱さを、聖霊は救ってください」と、軽快な3拍子にのって歌われる第1部に続いて、第2部では落ち着いた4拍子にリズムが変わり、8つのパートが次々とテーマを歌いつないでゆく。第3部はAlla breveの2拍子で、しかも4声の合唱に変化する。包み込むような豊かさ、受容される安心感が全体を支配する。最後の第4部はコーラルで、J.S. バッハの和声付けの力量が遺憾無く発揮されて、全曲を締めくくる。

「主に向かって新しい歌をうたえ」(モテット1番)は1726~1727年に作曲されたものである。テキストの内容をストレートにあらわすかのように、非常に明るく軽快な3拍子で曲が始まる。8つのパートがさまざまに絡み合い、テーマを主張し合いながら、次第に一つの大きなうねりを形成して、第1部を終える。続く第2部では、ゆったりとした4拍子で2コーラスがコーラルをフレーズごとに語り継ぐすきまに、1コーラスが「神よ、これからも私達を顧みてください」と、繰り返して繰り返して歌い重ねてゆく。続く第3部では「一能のゆえに主をほめ讃えよ！」と、小気味よいメリスマと力強いパスのコンティヌオで二つの合唱団が掛け合いながら一つの山に向かって登りつめてゆく。そして最後の第4部では、4声の合唱となって「息をしているものは全て、主をほめ讃える。アレルヤ！」と歌い、壮大で明るいこのモテットをしめくくるのである。

# 歌詞対訳

PSALM 100

〈Jauchzet dem Herren, alle Welt〉  
Schütz

Jauchzet dem Herrn, alle Welt!  
Dienet dem Herrn mit Freuden,  
Kommet vor sein Angesicht mit Frohlocken!  
Erkennt, daß der Herr Gott ist!  
Er hat uns gemacht, und nicht wir selbst,  
zu seinem Volk und zu Schafen seiner Weide.  
Gehet zu seinen Toren ein mit Danken.  
zu seinen Vorhöfen mit Loben,  
danket ihm, lobet seinen Namen!  
Denn der Herr ist freundlich  
und seine Gnade währet ewiglich  
und seine Wahrheit für und für.  
Ehre sei dem Vater und dem Sohn  
und auch dem Heiligen Geiste,  
wie es war im Anfang, jetzt und immerdar  
und von Ewigkeit zu Ewigkeit. Amen.

Deutsches Magnificat

〈MEINE SEELE ERHEBT DEN HERREN〉  
Schütz

- <sup>46</sup> Meine Seele erhebt den Herren,  
<sup>47</sup> und mein Geist freuet sich Gottes, meines Heilandes.  
<sup>48</sup> Denn er hat die Niedrigkeit seiner Magd angesehen,  
Siehe, von nun an werden mich selig preisen alle Kindeskind.  
<sup>49</sup> Denn er hat große Ding an mir getan,  
der da mächtig ist und des Name heilig est.  
<sup>51</sup> Er übet Gewalt mit seinem Arm, und zerstreuet,  
die hoffärtig sind in ihres Herzens Sinn.  
<sup>52</sup> Er stößet die Gewaltigen vom Stuhl  
und erhöht die Niedrigen.  
<sup>53</sup> Die Hungerigen füllet er mit Gütern  
und lässet die Reichen leer.  
<sup>54</sup> Er denket der Barmherzlichkeit  
und hilft seinem Diener Israel auf,

詩編100

〈全地よ 主に向かって喜びの叫びをあげよ〉

全地よ 主に向かって喜びの叫びをあげよ  
喜びをもって主に仕え  
喜び踊って御前に進み出よ  
知れ 主こそ神であると/  
私たちを造られたのは主であつて我々自身ではない  
主は我々をその民、その牧場の羊とされた  
感謝しつつ主の門に進み  
誉め讃えつつ主の大庭に入れ  
感謝して 御名を讃えよ/  
主は恵み深く  
その慈しみはとこしえに  
その眞実はやがて及ぶ  
栄光あれ 父と子と  
また聖霊に  
初めにそうであつたように今もこれからも  
代々とこしえに アーメン

〈聖母感謝唱〉

ルカ伝第1章

- <sup>46</sup>(するとマルアは言った)  
「わたしの魂は主をあがめ、  
<sup>47</sup>わたしの霊は救い主なる神をたたえます。  
<sup>48</sup>この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。  
今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と  
言うでしょう。  
<sup>49</sup>力あるかたが、わたしにおおきな事をしてくださつ  
たからです。そのみ名はきよく、  
<sup>50</sup>そのあわれみは、代々限りなく  
主をかしこみ恐れる者に及びます。  
<sup>51</sup>主はみ腕をもって力をふるい、  
心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、  
<sup>52</sup>権力ある者を王座から引きおろし、  
卑しい者を引き上げ、  
<sup>53</sup>飢えている者を良いもので飽かせ、  
富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。  
<sup>54</sup>主は、あわれみをお忘れにならず、  
その僕イスラエルを助けてくださいました、

<sup>55</sup> wie er geredt hat unsern Vätern, Abraham und seinem Samen ewiglich.

Ehre sei dem Vater und dem Sohn und auch dem Heiligen Geiste,  
wie es war im Anfang, jetzt und immerdar und von Ewigkeit zu Ewigkeit. Amen.

〈MAGNIFICAT ANIMA MEA DOMINUM〉

Buxtehude

<sup>46</sup> Magnificat anima mea Dominum,

<sup>47</sup> Et exultavit spiritus meus in meo.

<sup>48</sup> Quia respexit humilitatem ancillae suae: ecce enim ex hoc beatam me dicent omnes generationes.

<sup>49</sup> Quia fecit mihi qui potens est: et sanctum nomen ejus.

<sup>50</sup> Et misericordia ejus a progenie in progenies: timentibus eum.

<sup>51</sup> Fecit potentiam in brachio suo;  
dispersit superbos mente cordis sui.

<sup>52</sup> Deposuit potentes de sede,  
et exaltavit humiles.

<sup>53</sup> Esurientes implevit bonis:  
et divites dimisit inanes.

<sup>54</sup> Suscepit Israel puerum suum, recoudatus  
misericordiae suae.

<sup>55</sup> Sicut locutus est ad patres nostros.  
Abraham et semini ejus in saecula.

Gloria patri, et Filio, et Spiritui Sancto.  
Sicut erat in principio, et nunc, et semper, et in saecula saeculorum. Amen.

<sup>55</sup> わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とを  
とこしえにあわれむと約束なされたとおりに、

父と子と聖霊とにみ栄あれ。

初めにそうであったように、いまも、いつも  
代々限りなく。アーメン。

〈聖母感謝唱〉

ルカ伝第1章

<sup>46</sup>(するとマルアは言った)

「わたしの魂は主をあがめ、

<sup>47</sup> わたしの霊は救い主なる神をたたえます。

<sup>48</sup> この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。  
今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と  
言うでしょう。

<sup>49</sup> 力あるかたが、わたしにおおきな事をしてくださっ  
たからです。そのみ名はきよく、

<sup>50</sup> そのあわれみは、代々限りなく  
主をかしこみ恐れる者に及びます。

<sup>51</sup> 主はみ腕をもって力をふるい、  
心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、

<sup>52</sup> 権力ある者を王座から引きおろし、  
卑しい者を引き上げ、

<sup>53</sup> 飢えている者を良いもので飽かせ、  
富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。

<sup>54</sup> 主は、あわれみをお忘れにならず、  
その僕イスラエルを助けてくださいました、

<sup>55</sup> わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とを  
とこしえにあわれむと約束なされたとおりに、

父と子と聖霊とにみ栄あれ。

初めにそうであったように、いまも、いつも  
代々限りなく。アーメン。

### III 部

#### MOTETTE II

Der Geist hilft unsrer Schwachheit auf  
聖霊は弱い私達を助けてくださる

Der Geist hilft unsrer  
Schwachheit auf,  
denn wir wessen nicht, was wir  
beten sollen, wie sich gebühret,  
sondern der Geist selbst  
vertritt uns aufs beste  
mit unaussprechlichen Seufzen.  
Der aber die Herzen forschet,  
der weiß, was des Geistes Sinn  
sei, denn er vertritt  
die Heiligen, nach dem es  
Gott gefällt.

(Choral)

Du heilige Brunst, süßer Trost,  
nun hilf uns fröhlich und  
getrost in deinem Dienst  
beständig bleiben,  
O Herr, durch dein' Kraft  
uns bereit und stärk  
des Fleisches Blödigkeit,  
das wir hier ritterlich ringen,  
durch Tod und Leben zu dir  
dringen. Halleluja!

聖霊は弱い私達を助けてくださる。  
なぜなら、私達は  
どう祈ったらよいか分からないが、  
聖霊自ら言葉に表わせない  
切なるうめきをもって、私達のために  
取りなしてく下さるからである。  
そして人の心を探り知る方は、聖霊の  
思うところが何であるのかを知って  
おられる。なぜなら、聖霊は  
聖徒たちのために、神の御旨に  
かなうとりなしをして下さるからである。

(コラール)

聖なる情熱、快い慰めである聖霊よ。  
今すぐ私達を喜びと安らぎのうちに  
いつまでも変わることなくあなたの  
御旨にかなう者とならせてください。  
おお、主よ、あなたのお力によって  
私達がおろかなる肉の誘惑と  
りりしく戦い、死せる時も生きる時も  
あなたのもとへ進んでいけますように、  
私達を導き、そして強めてください。  
ハレルヤ。

#### MOTETTE I

Singet dem Herrn ein neues Lied  
主にむかって新しい歌をうたえよ

Singet dem Herrn ein neues Lied,  
die Gemeinde der Heiligen sollen ihn loben,  
Israel freue sich, der ihn gemacht.  
Die Kinder Zion sei'n fröhlich über ihrem Könige,  
sie sollen loben seinen Namen im Reigen,  
mit Pauken und mit Harfen sollen sie ihm spielen.  
Wie sich ein Vat'r erbarmet  
Gott, nimm dich ferner unser an,  
so tut der Herr uns allen,  
so wir ihn kindlich fürchten rein.  
Er kennt das arm Gemächte,

主に向かつて新しい歌をうたえよ。  
聖徒のつどいで、主をほめたたえなさい。  
イスラエルよ その造り主を喜び  
シオンの子らよ、その王を喜びなさい。  
踊りをもって主の御名をほめたたえ  
鼓と琴をもって主をほめたたえよ。  
父がその幼子をあわれむように  
神よ、これからも私達を顧みて下さい  
主は私達をあわれみたまひ、  
私達は幼子のように主を恐れる  
主は造られた者の貧しい様を知っておられる。

Gott Weiß, Wie sind nur Staub,  
denn ohne dich ist nichts getan, mit allen unsern  
Sachen;  
gleich wie das Gras vom Rechen,  
ein Blum und fallend Laub!  
Der Wind nur drüber wehet,  
so ist es nicht mehr da.  
Drum sei du unser Schirm und Licht,  
und trügt uns unsre Hoffnung nicht,so wirst du's  
ferner machen.  
Also der Mensch vergehet,  
sein End das ist ihm nah.  
Wohl dem,der sich nur steif und fest auf dich und  
deine Huld verläßt,  
Lobet den Herrn in seinen Taten,  
lobet ihn in seiner großen Herrlichkeit,  
Alles,was Odem hat, lobe den Herrn, Halleluja,

神の知りたもうように、私達はちりにすぎない。  
あなたなしには私達は何をなすこともできないのです。

熊手にむらがる草花が  
落葉のようなものである。  
ひとたび風が吹けば  
もはや跡かたもなくなるのだ  
ですから、私達のかさ、光となって下さい。  
そして私達が、この希望に忠実であれば、あなたは、  
今後もそのようにして下さるはずです。  
このように人も死にゆき、  
その最後はもはや近いのだ。  
あなたとあなたの愛をひとすじに頼みとする者は幸せ  
である。  
その大能のゆえに主をほめたたえよ!  
その偉大なる栄光のゆえに主をほめたたえよ!  
生命ある全てのものは主をほめたたえよ、ハレルヤ

## 盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

1977年2月27日「カンタータを歌う会」として発足

6月28日「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称

1978年2月26日「バッハコンツェルト」カンタータ第45番、芸大と共演	指揮 小林 道夫
1979年10月6日「BACH ABEND」カンタータ第158・131番	指揮 小林 道夫
1980年2月27日「バッハの夕べ」カンタータ第80番、芸大と共演	指揮 小林 道夫
1981年7月4日「BACH ABEND」カンタータ第196・182番	指揮 小林 道夫
1982年11月22日「バッハの夕べ」カンタータ第158・4番	指揮 佐々木正利
1985年3月16・17日 J. S. バッハ生誕300年記念演奏会「ヨハネ受難」(仙台宗教音楽合唱団と合同演奏)	指揮 佐々木正利
1985年11月3日 仙台北教会宗教音楽の夕べ「メサイア」	指揮 佐々木正利
1985年11月29日 G. F. ヘンデル生誕300年記念演奏会「メサイア」	指揮 佐々木正利
1986年4月11日 「宗教音楽の夕べ」シュツツ「ドイツ・レクイエム」バッハ「モテット1番」他	指揮 佐々木正利
1986年4月～5月 第1回ドイツ演奏旅行	指揮 佐々木正利
1986年7月11日 「東京ゾリステン演奏会」共演、ペルゴレージ「スターバト・マーテル」	指揮 赤松 安
1987年3月28日 創立10周年記念演奏会「カンタータの夕べ」	指揮 佐々木正利
1987年11月27日 ムジカ・デラルテ・トウキョウ演奏会「バロック音楽の夕べ」(主催)	
1988年3月12・13日 仙台宗教音楽合唱団(創立20周年)との合同演奏会「ミサ曲口短調」	指揮 佐々木正利
1988年9月17日 「今仲幸雄リサイタル」(主催)	
1988年11月17日 「ミヒヤエル・ショツパー バイオリン リサイタル」(主催)	
1989年4月24日 「二重合唱の夕べ」バッハ「モテット2番5番」他	指揮 佐々木正利
1990年3月10・11日 「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団合同演奏会」バッハ「クリスマス・オラトリオ」第4部～第6部「ミサ曲へ長調」	指揮 佐々木正利
1990年10月1日 「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」(主催)	
1990年12月～1991年1月 第2回ドイツ演奏旅行	指揮 佐々木正利

この他クリスマスチャリティコンサート、チャペルコンサート、合唱祭、新春コーラスコンサート等に出演。

## 第2回ドイツ演奏旅行

### A. プログラム

J. S. バッハ クリスマス・オラトリオⅣ・Ⅴ・Ⅵ

### B. プログラム

J. S. バッハ モテット I・II

H. シュッツ ドイツ語 マニフィカート  
ダビデによる詩編100番

D. ブクステフーデ マニフィカート

1990. 12. 24 デュッセルドルフ 日本人教会 [B.プログラム]  
26 シュバーレンベルク シュバーレンベルク教会 [B. プログラム]  
28 ハーゲン ハスペ教会 [B.プログラム]  
30 ヴィルヘルムスハーフェン バンター教会 [B. プログラム]  
1991. 1. 2 ハノーバー エクステルタルアルメーナ教会 [B. プログラム]  
4 デットモルト 『日本の夕べ』ノイエアウラホール  
5 デットモルト デットモルト北西ドイツ音楽大学  
[A. プログラム]  
6 ヴァールブルク 聖マリア教会 [A. プログラム]





## 演奏会の御案内

マックス・ヴァン・エグmont バリトン・リサイタル  
1991. 4. 8日(月) 岩手県民会館中ホール

### バリトン

マックス・ヴァン エグmont

1936年、ジャワ島セマラングでオランダ人の両親の間に生まれる。オランダ帰国後、社会学、心理学を学び、数年間放送局のアナウンサーを務める。その間、声楽をヴァリシグン女史に師事、59年スヘルターヘンボス声楽コンクールで優勝。以来、歌手としての道を進む。オランダ他ヨーロッパ各国、カナダ、アメリカ、ブラジルなどでコンサート歌手、オラトリオ歌手としてデビューし、高い評価を得ている。

彼のレパートリーの中心はまずバッハであり、アーノクワールとレオンハルト指揮による『カンタータ全集』『マタイ受難曲』等の歌唱はその格調の高さにおいて比類がない。バロックから現代まで広いレパートリーをもつが、近年はシューベルトのリートにも力を注いでいる。

### オルガン

鈴木雅明

神戸生まれ。12歳から教会オルガニストを務める。東京芸術大学作曲科卒業後、同大学院にてオルガン、チェンバロを学ぶ。

1979年よりアムステルダムのスウェーリング音楽院にてトン・コープマン、ピート・ケーに師事し、チェンバロ、オルガン共にソリスト・ディプロマを得て卒業。80年プリュージュ国際チェンバロコンクール(通奏低音)第2位、82年同オルガンコンクール第3位入賞。デュイスブルク国立音楽大学講師、松陰女子学院大学助教授を経て、90年から東京芸術大学にてオルガン、チェンバロの指導にあたる一方、全国各地で、またヨーロッパ各地でソリストとして演奏活動を行い、好評を得ている。

## 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会

1992. 3. 21(土) 岩手県民会館大ホール

盛岡バッハカンタータ・フェラインは、主としてバッハの教会カンタータを演奏する事を目的として結成され、今年で14年目を迎えます。これまで、バッハの教会カンタータを中心とした演奏会を多数開催、西ドイツの演奏旅行も行いました。只今、会員を募集しております。合唱経験の有無、個々のレベルは問いません。合唱が好き、音楽が好き、という方、大歓迎!私達と一緒に歌いましょう。バッハの音楽は決してかた苦しいものではなく、人間味にあふれ、時を越えて私達の心に語りかけてきます。

どうぞお気軽に練習会場においで下さい。

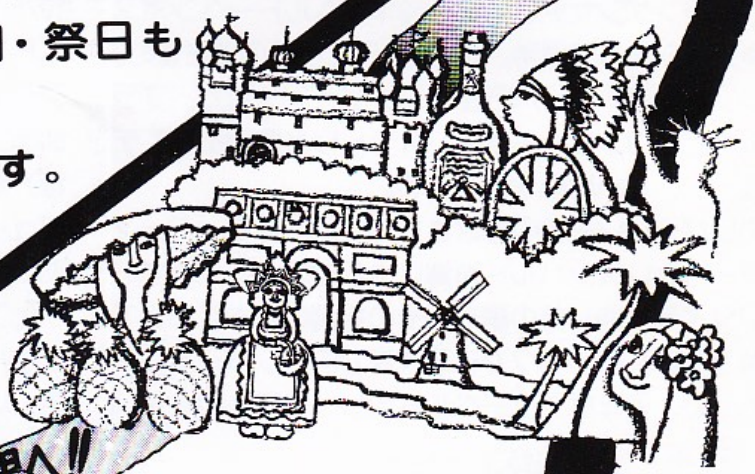
- 練習日 毎週火曜日 PM6:30~9:00
- 会場 カトリック志家教会礼拝堂
- 連絡先 小野寺昌勝 62-0872

# ベールをかぶる日まで、あと何日？



## ハネムーンキャンペーン

土曜日の午後、日・祭日も  
営業して  
おります。



このムードを、そのまま二人の世界へ！

ルックワールドに  
ご参加のカップルに!!  
もれなく5つの特典

- 特典1** 海外旅行用 スーツケース 大型1個  
無料貸し出し
- 特典2** 海外旅行用 ドライヤー  
無料貸し出し
- 特典3** 旅行用 ショルダーバック  
プレゼント 身の廻り品の携帯に大変便利
- 特典4** ルックワールドの  
素敵なテレフォンカードプレゼント
- 特典5** 旅を彩る小さなアイテムプレゼント
  - 旅のしおり
  - ネームタック
  - 訪問都市のガイドマップなど

ご相談に、ご来店できない方は  
お電話・お八ガキによるご相談・お申し  
込みも受け付けます。

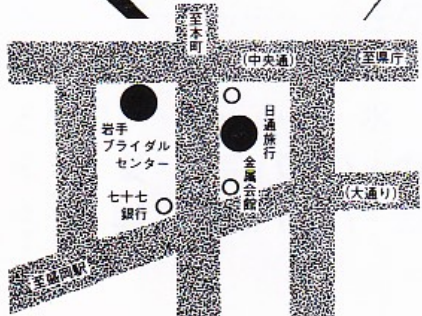
旅の専門店

### 通 日通旅行

日本通運(株)盛岡旅行営業所 運輸大臣登録一般第19号

〒020 盛岡市中央通2丁目11-17  
TEL 0196-53-3166  
FAX 0196-53-2204

営業時間 9:00~17:30



お友達やお知り合いの方で、これからご結婚  
される方をご紹介下さい。  
ご成約の折には紹介下さった方に記念品をさ  
し上げます。

